

の旅に出發できたのに、という小さな胸のうずきとともに
かんがえるのだった。

全体がマイナスイメージの形容詞句で飾られているこの
物語は、校長の説教のあと、誠史と邦俊が二人だけで、船
をつくりはじめるあたりから、妙に明るいタッチで描かれ
るようになる。このラストでも、「夢のような」とか「胸
のわくわくするような冒険」とか、プラスイメージの言葉
がおかれている。

海へ出た二人は帰らない。しかし、那須正幹は、この二
人の船づくりの作業を、「死」というイメージが浮かんで
くるのを用心深く後ろに追いやり、逆に意識的に明るく描
いている。

出航の準備に食料をそろえ、旗をつくる二人の姿は、作
品冒頭の暗さとくらべたら、ヘンに思えるほどに明るさを
誘う。例えば、ヘキヤビンは足のふみ場もないくらい」の
資材でいっぱいになる。整理してやっとキャビンで寝られ
るようになった二人は「大わらい」する。邦俊は「散歩に
でもさそうような調子」で「海にのりだすには、絶好の時
間だ」という。二人の船出は、那須のつくりだしだした明るい
イメージの言葉に見事なまでに包まれている。そして、エ
ピソードも同様な明るい言葉がおかれた中で、物語はとじ
られる。

どう考えても、死出の旅にちがいないラストシーンで、
逆にプラスイメージの言葉を多用する。その作家の感性に、
ぼくは読みながら、不思議な興奮をおぼえていた。なぜ、
その不思議さを、何十年もたった現在まで、ぼくは覚えて
いるのか。

それは、同じ年の十二月に出版された『あやうしズッコ
ケ探険隊』を読んで、その興奮に追い討ちをかけられたか
らだ。ズッコケシリーズ第四作になるこの作品は、ハチベ
エ、ハカセ、モーちゃん三人組が漂流している場面から
始まる。

東の方向にかすかに見えていた陸地が水平線のもやの中
にしずむと、見わたすかぎり空と海だけになった。船は大
きなうねりにのって南西にむけて流れていく。

これはもう、『ぼくらは海へ』の続きの話という他はな
い。片方が船で海へ出たところで終わる。もう一方が、船
で漂流しているところから始まる。二つの本を読んだ読者
は、みな《一方の終わりからもう一方が始まっているとい
う事実》に気づくはずだ。

『ぼくらは海へ』という作品は、今の子どもたちの暗い閉
塞的な状況を描いたものだ。マイナスイメージの言葉が多
く出てくるのも、そのためだ。登場人物それぞれが典型的